

他の侵寇の場合に於るが如きに止まらざりしなる可きを信じて疑はず、然も宰相頓莫賀達干は、可汗を諫めて此の舉を阻止せんとし、其の聽かざるや遂に之を殺し、自から立ちて可汗となり、新たに唐と親善の關係を結ぶに至れり。

此の時代に於ける北方の事情は、少しも之を尋究すべき史料の存するもの無けれ共、前代可汗の時代に於ては、屢々近隣諸部と事を構へて其の征討に従事し、未だ自から南方唐に對する經略を進むる能はざりしに、此の可汗の時代となりて、急に其の態度を變じ、可汗自から師を率ゐて南下したるを始め、常に唐に迫らんとする態度を取りしに鑑むれば、思ふに當時北方諸部との關係は、緊迫の情態に非りしなるべく、少くとも諸部が回鶻に迫らんとする如き有様に非りしものなること疑無かるべし。

第四章 頓莫賀達干 (合骨咄祿毗伽可汗) の時代

(唐より與へたる徽號を武義成功と曰ひ、又長壽天親と曰ふ)

頓莫賀達干トモヘが大曆十四年(七七九年)位に即きしことは前述の如くなるが、其の死は貞元五年(七八九年)なりしこと新舊唐書冊府元龜唐會要等の悉く一致する所なり、たゞ舊書には本紀にも廻紇傳にも、之を以て此の年十二月の事とし、通鑑も之に従へるも、唐會要には九月とせるの相違あるのみ。

此の可汗の位に即きし事情は前に述べたるが如し、されば即位の際には牟羽可汗の親信及び九姓胡幾んど二千人を殺したりしがトモヘ、即位の後も尙國內動搖して定まらざりしが如く、通鑑建中元年八月の條に振武の留後張光晟の上